

臨床心理学における「性に対する態度」研究の展望 ：医学・教育・心理学の性に関する文献レビューに よる検討

浜田, 恵
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/25147>

出版情報：九州大学心理学研究. 13, pp.93-100, 2012-03-30. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

臨床心理学における「性に対する態度」研究の展望

— 医学・教育・心理学の性に関する文献レビューによる検討 —

浜田 恵 九州大学大学院人間環境学府

Perspective of the studies on the sexual attitudes in clinical psychology

: Discussion based on the review of sexuality in medical science, education and psychology

Megumi Hamada (Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University)

The purpose of this study is to consider the significance of dealing with “sexual attitudes” in clinical psychology by reviewing previous study. First, the definition and concepts were clarified. “Sexuality” consists of seven components. Second, the previous studies in medical science, education, and psychology were reviewed. Medical science suggests as the factors of the sexual dysfunction the sense of negative sexual attitudes to sexuality and the difficulty in getting an interpersonal relationships. Further, education made us realize that how we are dealing with the topic of sexuality is important, and psychology made a point about sexual attitudes in particularly the whole tendency. On the basis of the review, this study suggests that self-direction toward sexual attitudes is important. In addition, how clinical psychology deals with sexual attitudes is considered. The study discusses that the approach to deal with negative sexual attitudes and how a person develops sexual attitudes.

Key Words: sexuality, sexual attitudes, self-direction

I 問題と目的

本研究は、臨床心理学において、性に対する態度を研究する際の視点を、医学、教育学および心理学の文献考察を通して検討したものである。

性とは、人間の Quality of Life に関わる重要な要素である。性的な欲求や衝動、興奮を感じることやそれらを伴う行為は、人間にとって身近なものである。それにも関わらず、性はタブーであり、抵抗があり、容易に触れられないという一面を持っている。私たちはこの矛盾した性に対してどのように向き合い、何を選択すればよいのか、わからないことが多い。

しかし、人間の性行動は、個人的・社会的責任が伴うものであり、本能的行動ではなく社会的行動である（松本, 2005）。すなわち、私たちは、性的欲求のままに行動するのではなく、社会の規範やそれまでの経験、パートナーとの関係・責任のもとに考え、判断し、行動することが求められているといえよう。

そうした行動に至るまでの考えや感情の総体を「態度」という。性行動や欲求を良いものと捉える人もいれば、あまり肯定的な意味を見出せない人もいだろう。もちろんそうしたことにほとんど関心を持たないという姿勢の人もある。Kaplan (1979/1997) は、セックスに対する否定的意味づけ（恥や罪や恐れ）は、個人にも人間関係にも害を及ぼすと述べている。また、避妊行動に関し

ては、知識だけでなく、性に対する価値観や態度の重要性が述べられており（蒲池ら, 2007; 小野寺, 2007）、「性に対してどのように思ったり感じたり考えたりしているか」、すなわち「性に対する態度」は、性行動に影響を与える一要因であると考えられる。ところが、臨床心理学において性を扱った研究はあまり見られない。

それに対して臨床心理学の近接領域である、医学や教育、心理学の中ではその扱いの難しさも含めて、研究が行われてきた。ただし、多様な面を持つ性は、研究においても、どの分野から性のどの面に焦点をあてるかによって、研究の内容がガラリと変わる。性に対する態度を直接研究したものは多くはないが、各分野での性の問題とその対応および課題を見ることは、各分野がどのような性に対する態度でいるのかを見ることになり、臨床心理学が研究を行う上で、参考とするべき現状や知見が多いと考えられる。性行動や性的な欲求、関心に焦点をあてた研究を整理し、臨床心理学的な研究を行うための示唆を得ることは、幅広い領域を持つ「性」の理解の一翼を担うことになると考えられる。

本研究の目的 本研究では、「性」に関する研究を概観することで以下3点を明らかにすることを目的とする。

- (1) 幅広い意味を持つ「性」の概念について、どのようなものが含まれるのか整理する。
- (2) (1)で明確にした「性」について医学・教育・心理学で扱われてきた内容を概観する。

- (3) (2)を踏まえて、臨床心理学の中で「性に対する態度」を研究する上で必要と思われる視点を提案する。

II 「性」について

本章では、「性に対する態度」を知る足がかりとして、性行動や性的欲求がどのように解明されてきたのかをまとめる。

性の定義 「性」は多様な意味を包含する言葉である。定義や分類は見られるが（松本，2005；針間，2000），やはり曖昧であると言わざるを得ない。松本（2005）は、「性」の意味について、その語源がラテン語の *seculus* で *section*（切断）と同じであり、分割された片方を意味し、2つの性が結合した人間の原型が分断されたことで男女の両性が出現したとするプラトンの説を挙げた。そこから、「性」とは、男であること、女であることであり、そのことから生じるすべての身体的、精神的、社会的なことから意味し、あるいは男であり、女であることから生じる作用、ないしは行動のかかわりあいとしての相互作用」と述べた。このような包括的な説明は見られるが、研究者間での共通した定義づけはされていないのが現状である。

性の分類 針間（2000）は、「性」は7つの構成要素からなるとし、以下のように挙げている。すなわち、身体的性別・心理的性別・社会的性役割・性指向・性嗜好・性的反応・生殖の7つである。（Table 1）

これらのうち、身体的性別はさまざまな研究において性差の検討として注意が払われ、心理的性別は身体的性別との不一致による性同一性障害の関心が高まり、性同一性障害の人の心理検査（ロールシャッハ・テストなど）に関する研究がいくつか行われている（児玉，2009 年

）。社会的性役割は性役割尺度など「男性性」「女性性」に関する研究が行われている。以上、身体的性別・心理的性別・社会的性役割の3つの分野に関しては臨床的関心や研究の積み重ねが行われてきたが、性指向・性嗜好・性的反応という、性行動に関わる「性」は臨床心理学的研究がほとんどなされていない。

性行動・性の概念の解明 精神分析の創始者である Freud（1905/1969）は小児性欲と、性的快感の発現やその高まりについて詳細な考察を行った。ヒステリー発病のメカニズムとして、性の抑圧（性の問題と知的に取り組むことからの本能的な逃避）と、自らの成熟により性的欲求が起こってくるのが重なることで、欲動の圧迫と性的なものを拒否する反抗との間で疾患という逃げ道が作られる、と説明した。当時の女性のヒステリー症状の理解として、抑圧された性的欲求や性的外傷体験、性的葛藤を言葉にすることが治療的であると示した。また、性感帯の刺激による前駆快感から性的緊張を経て、性的快感（射精）に至るまでのメカニズムを考察した。

他方、アメリカでは性行動解明のための調査や研究が20世紀半ばより進み、性反応を科学的に明らかにしていった。生物学者であった Kinsey のグループは、面接聞き取り調査にて約18000人のアメリカ人の性行動を調査し、『男性の性行動』（1948/1950）、『女性の性行動』（1953/1954）として初めて明らかにした。また、Masters et al（1966/1980）は人間の性反応を実験室で直接観察するという画期的な方法で、身体的な変化を詳細に記録し、人間の性反応の3段階（興奮相、オルガスム相、消腿相）を発見した。彼らは性治療 *sex therapy* という言葉を初めて用いた。続いて Kaplan が3段階の最初に性欲相を付け加え、性治療をより洗練されたものにしていった。近年でも性反応についての研究は進んでおり、男性

Table 1
セクシュアリティの構成要素（針間（2000）より作成）

1. 身体的性別	性染色体、性腺、性ホルモン、内性器、外性器などの身体的な男女の性別。英語では sex。
2. 心理的性別	心理的な自己の性別認知。gender identity とも言われる。「自分は男である」「自分は女性である」「自分は男性でも女性でもない」などの性別認知がある。
3. 社会的性役割	gender role や social sex role と言われ、社会生活を送る上での性役割をさす。典型的な社会的性役割から外れた行動をとると、「女のくせに」「男なら男らしく」などのように社会的な非難、圧力がかかることがある。
4. 性指向	sexual orientation。性的魅力を感じる対象の性別が何かということ。異性愛、同性愛、両性愛、無性愛（男女いずれにも魅力を感じない）がある。
5. 性嗜好	sexual preference。性的興奮を得るためにどのような行動や空想を欲するかということ。通常は同意を得た年齢相応のパートナーとの抱擁や性交によって興奮することが多いが、そのほかのもので興奮する者もいる。
6. 性的反応	性交などの性的状態時における身体および心理低反応。欲求相、興奮相、絶頂相、解消相の4段階に分かれる。
7. 生殖	生殖能力（産める、産めない）の問題、生殖意思決定（産む、産まない）の問題に分かれる。

は直線型（性欲相→興奮相→オルガスム相→消腿相）にあてはまることが多いが、女性は円環型（心理・社会・生物的側面に影響を受ける）(Basson et al, 2005) ということが明らかにされ、心理的側面も含めた理解が行われている。こうした性反応の解明が性機能不全の重要な理論となっていく。

Ⅲ 医学・教育・心理学における「性」に関する研究

本章では、性行動や性的欲求・衝動に対して、医学・教育・心理学がどのように研究を行ってきたのかをまとめる。それぞれの分野では独立に研究が行われてきた。前章で述べたように、性行動そのものはしくみが解明されている。しかし、性のどの部分を見るかによって対応は変わってくる。

日本の医学における「性」医学では、障害や病気である部分の性を扱っている。

DSM-IVでは、性の障害として、性機能不全、性同一性障害、性嗜好異常の3つが挙げられている。そのうち、性機能不全が性反応に関わるものである。性反応の段階に即して、性欲相の障害として性欲低下障害・性嫌悪症、興奮相の障害として勃起障害（男性）・女性の性的興奮の障害、オルガスム相の障害としてオルガスム障害・陰内射精障害・早漏・性交疼痛障害がある（APA, 2000/2003）。日本において性機能不全が目ざされ始めたのは、セックスレスという言葉が出てきてからである。これは、阿部が1991年の第11回日本性科学会において提唱し、1994年に再定義したものである。阿部（2004）によると、セックスレスは「特別な事情がないにもかかわらず、カップルの合意した性交あるいはセクシャル・コンタクトが一月以上なく、その後も長期にわたることが予想される場合」を指す。その言葉が生まれ、知られるようになってから注目が集まっている。

阿部（2004）は精神科医としてセックス・セラピーに携わる中で、近年のセックスレスカップルに比較的若い人々が増えていることを指摘した。阿部（2004）は、男性について、若い男性の性嫌悪症は日本に特有だと言い、「本来若く生命力に溢れ、生殖年齢のただ中にある二十代、三十代の人達が「面倒くさい」「疲れるだけで無駄」と訴えるのはとても自然なこととは思えない」と述べた。さらに、大川（2009）は、女性について、日本人女性の抱える性の問題に性機能障害がある女性と共通する部分として、「一般的なセックスへの否定的感情」を挙げた。このように性そのものに対する否定的な態度が原因のひとつであるとする見方がある。

一方で金子（2001）は性機能障害の心理的要因として、性的なことへの嫌悪感や不潔感という問題に加えて、挿

入だけができないなど、人を相手にしたときの“入る”（男性），“受け入れる”（女性）という対人関係の問題があることを指摘している。男女別の視点としては、婦人科医である大川（1998）は女性の性欲障害には“親密な関係性”への不安があること、精神科医である阿部（1998）は男性の性回避について、患者の性格特徴が回避型人格障害の特徴と類似する点があると報告している。いずれにしても、単にセックスができない、性行為に関心がないという見方だけでなく、その背後に対人関係上の問題があるという考えである（阿部, 2004）。性機能障害と対人関係をテーマにしたものとしては、いくつかの症例報告がなされている。たとえば、親密になることへの不安（金子, 1995）、ワギニズムス（女性の性機能障害）患者とパートナーとの関係（渡辺・金子, 1996）、ワギニズムス患者と父および母との関係（金子・渡辺, 1997; 渡辺・金子, 1997）が事例等で報告されている。塚田（2009）は、性嫌悪症の男性患者の精神療法を報告している。妻とセックスできないことや性への罪悪感を訴えた患者だったが、5回の精神療法で両親の原光景を思い出し、それを理解することで症状の改善に至った。だが塚田は“短期精神療法で改善したかに見えるが、今後、性障害以外の領域で何らかの不適応を起こす可能性”もあると考察している。しかし、患者としては、性行動ができるかできないかということや、その嫌悪感等の否定的な感情にとらわれがちになるようである。したがって、塚田自身が“治療者としては不全感の残る治療経過”と述べる通り、対人関係の難しさなどの心理的要因は患者のニーズではなく、治療者側の感覚の問題であるかもしれない。

以上より、性機能の訴えの奥にある対人関係や性に対する態度を理解することが重要であるという治療者の見立てはありつつも、患者の側からすると性行動にとらわれがちになり、性を含む関係性を見つめることは難しいようである。ここに、治療者と患者のズレが生じていると考えることができる。その理由は明らかではないが、金子（2001）が性機能障害の治療において、問題に直面する自我の強さがない人達が増加しているという臨床での実感述べていることは、理由のひとつであるかもしれない。

このように、性機能障害の治療では、患者が性行動や性的パートナーに対して嫌悪感などネガティブな感情を抱き、それをなんとかしたいと思うことと、性関係以外やその先まで見据える治療者とのズレが生じていると考えられる。そのズレをうめるためには、針間（2004a）が性反応を理解する上では“主観的満足感”が大事になってくると述べるように、患者（困っている人）自身の否定的な感情を主体とした関わり方が必要なのではないかと考えられる。

教育分野における「性」 医学では障害や病気の部分の性を扱う一方、教育分野では、望まない妊娠や性感染症、性行動の低年齢化を予防するという観点から、性教育として性は扱われてきた。

基礎的な大規模調査としては、1974年より、日本性教育協会による「青少年の性行動全国調査」が始まり、性行動経験（性行動の低年齢化）と家庭・学校の友人関係・学校の授業などとの要因と、性行動（の低年齢化）との関連が6年おきに検討されている。しかし実践としては、各学校で養護教諭や保健体育、理科、家庭科等の教員が独自に手探りで行うしかない現状がある。

泉（1987）は主に1970年代のアメリカの青少年の性行動（妊娠、避妊、人工妊娠中絶、出産）に関する研究のレビューを行った。その中で、性的に活動的な少女は避妊具を持っていてもそれを使わないで性交する傾向があり、研究対象の4分の3の者は排卵の原理と時期について知っていてもそれを自己の避妊のために適用できる者が少ないという研究結果から、“知識は知的レベルの領域にのみ留まって行動に結びつかないということであり、従来の学校での性教育のあり方が問われる”と述べている。

Coleman et al（1999/2003）は、効果的な性教育について考察している。性教育が、生物学のみに焦点をあてることの効果を疑問視し、性教育は指図的であってはいけないし、何が正しくて何が正しくないかについて道徳的メッセージを与えるべきではないとしている。重要なことは、若者に、情報ならびに対人関係のスキルを与え、何が自分たちにとって正しいのかを理解した上で選択できるようにすることであると言う。

また、日野林（2006）は、性教育が戦後何度かのブームを経ても定着しなかった理由として8つを挙げているが、そのうちの4つは、①生理・生物学的啓蒙が中心であった、②実証的な性科学・性教育が未発達であった、③教えたいこと・教えられることを教えて、知りたいことを教えてこなかった、④知識を教えるだけで、青少年の自己決定権は考慮されなかった、ということであった。Coleman et al（1999/2003）と同様、生物学的な知識の教育やこうすべきといった道徳的な観点に留まるべきではないこと、本人が自分で判断できる能力を培う必要があることを指摘している。

だが、こうしたことは再三指摘されながらもなかなか定着していかない。それはなぜだろうか。

日野林（2006）は、性教育では“親や教師が性について語る態度そのものも問われることになる。大人のためらいや恥じらいは、いわば負（マイナス）の教育をしていることにもなる。性に対する自己肯定や自尊心ではなく、抑圧や罪悪感のみを世代間伝達していくことになるのである”と“無意図的な教育”に注意を払う必要があ

ると述べている。また、高田（2006）は“子どもの疑問・質問をおとながはぐらかすことなく、きちんと考え応えていくことが大切である”と述べている。こうした指摘を考慮すると、大人がどのような伝え方をするかということが、教える内容に加えて重要な点であることが推測される。

近年では、知識を一方的に教えるのではなく、ピアの力やグループディスカッションを取り入れることで、“性的自己決定能力”を高めるという試みがなされている（忠津ら、2009；田原、2011）。思春期の仲間関係の中で性の悩みや不安をチャムと共有することが重要だという渡辺ら（2002）の考察からも、こうした試みは有効であると考えられる。特に、インターネットや雑誌、コミックスなど性についての情報源が多い現代（性教育協会、2007）では、どの情報をどのように（積極的に、選択的に）自分のものにしていくかという個人の主体的な判断能力が問われると考えられる。

心理学における「性」の研究 医学・教育が性行動の推進・予防へのアプローチを行うのに対し、心理学では、性行動に至る心理的要因は何かということを知るための調査研究が行われている。実証研究としては大きく分けて、次の3つが行われてきたと考えられる。すなわち、(1)性的な存在である自分についてどう思うか（性的自己概念の理解）、(2)性行動や性交渉を行うことに影響を与える心理的要因は何か、(3)性に対してどのような態度でいるか、の3つである。

(1)は性的自己という自己の一部を理解することが中心であり、(2)(3)は主に性行動に焦点が当たっている。その中でも(2)は性行動の低年齢化等が念頭に置かれ、性行動実行の直接的・間接的要因を探ること、(3)は性行動や性的関係をどのような価値観や感情で捉えているかということ、が検討されている。これらは完全に分類される訳ではなく、重複する部分もある（たとえば、性的自己を捉える尺度の中に、性的関係をどう思うかという項目が含まれるなど）。以下、ひとつずつ研究を概観する。

(1) 性的自己概念の理解に関する研究

性的自己概念 (sexual self concept) は、日本ではほとんど研究されていない領域である。Vicberg et al（2005）は性的自己概念、Garcia et al（2001）は性的自尊感情 sexual esteem と、現実自己と理想自己の差について検討し、両者が負の関係であることを示した。O'Sullivan et al（2006）は、性的自己概念尺度の開発として、青年期女性対象に質問紙調査を行い、「性的興奮 sexual arousability」「性的作用 sexual agency」「否定的な性的感情 negative sexual affect」の3因子を見出した。日本では草野（2006）が性的自己意識として、①自己の性機能や生殖性や身体像など性的存在としての認知、②

自己の性的成熟性や性行動に対する感じ方と定義して、それぞれに対応する2因子（「性的魅力への満足感」「性的関係への肯定感」）からなる尺度を作成した。

(2) 性行動に影響を与える心理的要因に関する研究

先述の「青少年の性行動全国調査」の開始とほぼ同時期に間宮（1976）は、青年の環境要因（家庭の雰囲気、居住形態、近隣環境、アルバイト経験等）と性行動との関連を検討した。特に、思春期以降は友人関係が重視されるが、友人関係が性行動（性交）に影響していることとともに、性交経験者か未経験者かによって友人に対する感情（五十嵐・庄司，2005）や、性行動に対する友人とのやりとり（議論か承認か）が異なる（Treboux et al, 1995）ことも示されている。和田（1999）は、性行動の中でも性交に特化して、なぜその行為に及ぶのかということについて質問紙調査を行い、心理的要因として「愛情」「生理的覚醒」「状況圧力」の3因子を見出した。

(3) 性に対する態度に関する研究

Eysenck（1970）は、性に対する態度と行動に関する質問項目15因子98項目と、外向性・神経症・精神病をはかるパーソナリティ項目との関連を調べた。結果、性に対する敵意や罪意識、憂うつさが神経症の傾向と関連のあることが示された。また、清水（1979）はEysenckの項目から20項目選んで用い、親や友人（同性/異性）といった依存対象との関連を調べている。その中では、性的態度として、“不快である”“神経質”といったネガティブな側面や、“恥ずかしい”“不潔”といった性的道徳性が抽出されている。Hendrick et al（1985）は、それまでの研究の流れから、性的寛容性が性に関する研究では重要であるとしつつ、性に対する態度の多次元性の重要性を示唆している。和田ら（1990）は、これを受け、性（主に性交渉）に関して、寛容さだけでなく、“性的交流”というコミュニケーションを含むことを想定した尺度を作成しようとしたが、結果としては性的寛容さ・責任性・道具性の3因子を抽出するにとどまった。Treboux et al（1995）は結婚前の性行動として、どの程度なら許せるかという寛容さを検討した。益谷（1989）はモーシャアのセックスギルト（性罪悪感）尺度を実施し、日本での特徴を検討し、男女別の因子分析により、「行動抑制の次元」「道徳性の次元」「欲求抑制の次元」が性罪悪感にはあることを見出した。各分野の研究のまとめと課題 以上より、性機能障害の心理的要因として性的なことへの嫌悪感や、性的関係を含む対人関係が指摘されていること、その背景にはどのような態度で性に関する話題に接してきたかということが重要であることを、医学および教育における文献が主張していることが明らかになった。

「性」に限らず、臨床的には、何か出来事（たとえば、性機能障害、性感染症、性被害など）が起こることがまず問題となる。教育の分野はそうしたことが起こらないようにするにはどうしたら良いか、予防の観点から「性教育」により、「性」を取り扱う。それに対して、医学の分野では何か出来事が起こった後に何ができるかという「治療」により、「性」を取り扱っていると考えられる。いずれの分野も、内からくる性的関心・欲求や、外で起こる性的な経験への対応で手一杯になりがちである。しかし、医学・教育の分野で見たように、個人の主体性が重視されてきており、個人が主体的に「性」に取り組むという視点が重要であると考えられる。「主体性」とは、その人自身が性的な行動や欲求、関係についてのどのように思うかということ、すなわち「性に対する態度」を自らの意志で自覚できることである。

しかしながら、概観した心理学の研究は、大多数の傾向を把握するに留まっており、個別的理解には至っていないのが現状である。そこで、個別的理解や援助を念頭に置く臨床心理学において、「性に対する態度」を扱う意義について、「主体性」ということをもとに検討を行う。

IV 臨床心理学における「性に対する態度」

上述のように、「主体性」をもとにした「性に対する態度」を述べるために、個別的視点を持つことと、否定的態度を扱うことの2点を提案したい。否定的態度を扱うこと 性機能障害やセックスレスなど、性的行動の遂行に難しさを持つ人々の背景のひとつとして、性を否定的に捉えるという点が問題となっている。針間（2004b）は、二十代から三十代の性の悩みのひとつに、性的なものに否定的なイメージがあるために恋人ができないことを挙げた。一般的にも、大川（2009）は、日本人女性の抱える性の問題として、「一般的なセックスへの否定的感情」を挙げている。その要因としては、次の2点が考えられる。

1点目は、実際の性行動経験の中で否定的体験をしているということである。青年期に入った時点で性行動を経験している者は少なくない（性教育協会，2007）。だが、大学生がセックスに至った理由は、「好きだったから」が男女とも7割近くで高いものの、次に多い理由に「経験してみたいと思っていたから」（男55.8%、女37.6%）、「好奇心から」（男47.9%、女29.7%）が挙げられ、自分とパートナーを大事にした上での性行動ではない可能性が少なからずあり、必ずしも肯定的な性体験をしているとは考えにくい。

2点目は、幼少期から否定的な考えを持たされている可能性があるということである。O'Sullivan et al（2006）

は、性的自己概念尺度における「否定的な性的感情 negative sexual affect」因子は、過去の性体験とは一致せず、関連があったのは母親が是認すると感じる事が低いことや、性交抑制の信念を強く持っていることであることを見出した。O'Sullivan et al (2006) は、社会の要求に敏感で年齢や性別に相応しい態度や意見を出したのかもしれない、と考察している。Kaplan (1979/1997) が、セックスに対して否定的な姿勢を取ることは、子どもたちの性的情動的な生活を矮小化する影響力を持つと述べるように、親や周囲の考え方によっては、私たちは幼少期から知らず知らずのうちに、否定的な考え方を適切だと思っている可能性がある。

以上より、性に対しては否定的な感情をいつのまにか抱かされている可能性がある。Storr (1964/1992) は、性の逸脱に悩んでいる本人が、その性の在り方は胸がむかつくもの、ばかばかしいものと考えているうちは自分の中で変わることがなく、いつまでも自分の逸脱から抜け出せないが、よく理解しようとすれば、同情すべきものや成熟を目指す努力の跡に思われてくるという。このように、否定的な態度に巻き込まれるのではなく、自分が主体となってその態度を理解することが重要と考えられる。

今まで扱われてきた否定的態度は、罪悪感・劣等感 (Storr, 1964/1992)、嫌悪感・羞恥心 (Freud, 1905/1969)、性に対する敵意 (Eysenck, 1970)、嫌悪感・不潔感 (金子, 2001) などがある。しかし、調査研究で性に対する否定的態度に焦点づけた研究はあまり見られないため、こうした内容を扱った量的研究が必要と筆者は考える。個別の視点を持つこと 心理学の研究では、性に対する態度は研究されてきたが、態度を扱う上で個人がどのように感じているかを個別に扱うという視点がなかったように思われる。内藤 (1994) は、性的関係にあるパートナーがいる女性を対象に、個人の性の欲求や衝動、欲求生起に伴う生理的・身体的・心理的反応、対人イメージなどの連想を個別に尋ね、そうした態度が個人の中でどのように構造化されるのかを検討し、態度構造は個別に検討する必要があると主張している。したがって、個別の面接調査による検討が有効であると筆者は考える。

今まで、性に対する態度の研究は研究者側が提示した質問項目に、協力者が答えるという形が主であった。これでは、研究者が期待する周辺の内容は得られるが、個人の主体的感覚は生かされない。面接調査では、個別に、個人が性とどのように相対してきたのかその変遷も含めて検討することが可能である。それによって、個人が何に困り、それをどのように乗り越えてきたのか、困難なことであった際、何が必要かという臨床における援助のために必要な基礎的研究となるだろう。

ただし、性について話すことには注意点がある。それ

は、どの社会においても性はプライベートな事柄であり、むやみに話題にすることではない (高田, 2006) ということである。特に、性被害体験の援助にはむやみな言語化はさせない方が良いという考え方もある。村本 (2004) は性被害体験のある女性へのインタビュー調査を通して、被害体験を身近な人に打ち明け、共感してもらったり対処してもらったりしたケースでは、被害による否定的影響が少なくなると考察する一方、二次被害のリスクを考え合わせれば、被害を打ち明けないという選択も賢明なものではないかとも述べている。一方で北山 (2008) は、“性と性欲の問題だけは、正しい知識の獲得と相応しい言語化によって整理され、方略が見つかることがまだまだ多い”が、それが困難なのは“語彙はあっても語り合う相手や、語り合う場所がないということが原因”であり、“性の問題は、太陽の下ではなかなか語れない。(略) この領域では中立を保とうとする相談相手と相談室の存在が求められているのである”と述べている。したがって、自分の話したいことを話すには、秘密が守られる安全な場所や相手が必要となると考えられる。そして、どのように話すか、何を話さないのかということも含め、本人が主体的に選択できることが重要だろう。

しかし、このことは臨床的には重要な視点だが、研究としては、協力者の偏りや、協力者が話せることしか聞くことができないなど、実態をまんべんなく把握できないという限界を生む。だが、性に関する研究は自発的な協力者によって成り立ってきた (Davison et al, 1994/1998) という歴史を鑑みれば、その姿勢そのものが、個人の主体的な在り方を保証することになると言える。これらを踏まえ研究では、方法論的考察も交えて検討がなされるべきであろう。つまり、先述した個別・質的調査の限界を踏まえて、量的調査を組み合わせることである。主体的であることを保証する故に、より話しにくい話題には研究者から話題を焦点づける調査が、逆説的ではあるが必要となるのである。

V まとめと今後の課題

本研究の目的は、性に関する研究について、文献考察を行い、臨床心理学において性を扱う際の有効な視点を見出すことであった。まず、「性」の持つ意味や概念について整理した。次に、医学、教育、心理学における「性」の研究を概観した。医学においては、性機能障害の心理的要因としての性的なことへの嫌悪感や対人関係が指摘されていること、教育においては、どのような態度で性に関する話題に接してきたかということが重要であることが示された。心理学の研究では、「性に対する態度」の研究はされているが、個別的理解には至っていない

いことが示された。最後に、臨床心理学においてどのように「性」を扱うことが必要か考察した。否定的な態度を扱うことと、個別的視点を持つことが重要であり、「性に対する態度」において「主体性」が重要であることが示唆された。

今後は実証研究や臨床実践において、今回明らかになった内容を明確にしていく必要がある。文献考察としては、「性」を扱う領域が今回は医学・教育・心理学のみにとどまったことは今後の課題である。「性」は看護や福祉、司法などより幅広い領域でも扱われている。そのため、各領域が「性」に対してどのような知見を積み重ねているのか、どのような態度で臨んでいるのかを整理することは、「性」を立体的に理解していくために必要な過程であろう。

引用文献

- 阿部輝夫 (1998)：性と心身医学—男性の側面から—
心身医学, **38**(4), 247-257.
- 阿部輝夫 (2004)：セックスレスの精神医学 ちくま新書
- American Psychiatric Association (2000)：Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR 高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸訳 (2003)：DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院
- Basson R, Brotto LA, Laan E, Redmond G, Utian WH (2005)：Assessment and Management of Women's Sexual Dysfunctions: Problematic Desire and Arousal *The Journal of Sexual Medicine*, **2**, 291-300.
- Coleman J, Hendry LB (1999)：The Nature of Adolescence Third Edition 白井利明・若松養亮・杉村和美・小林 亮・柏尾眞津子訳 (2003)：青年期の本質 ミネルヴァ書房
- Davison GC, Neale JM (1994)：Abnormal Psychology 村瀬孝雄監訳 (1998)：性機能不全 異常心理学, 誠信書房, pp376-402.
- Eysenck HJ (1970)：Personality and Attitudes to Sex: A Factorial Study *Personality*, **1**, 355-376.
- Freud S (1905)：Three Essays on the Theory of Sexuality. 懸田克躬・吉村博次訳 (1969)：性欲論三篇 フロイト著作集第5巻, 7-94.
- Garcia LT, Hoskins R (2001)：Actual-ideal self discrepancy and sexual esteem and depression *Journal of Psychology & Human Sexuality*, **13**(2), 49-61.
- 針間克己 (2000)：セクシュアリティの概念 公衆衛生, **64**(3), 148-153.
- 針間克己 (2004a)：人間の性反応を理解する ターミナルケア, **14**(5), 356-359.
- 針間克己 (2004b)：二十代から三十代における性の相談 現代のエスプリ, **438**, 33-40.
- Hendrick S, Hendrick C, Slapion-Foote MJ, Foote FH (1985)：Gender Differences in Sexual Attitudes *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**(6), 1630-1642.
- 五十嵐哲也・庄司一子 (2005)：高校時の性交経験と友人関係—大学生に対する回想法を用いた調査結果から— カウンセリング研究, **38**(1), 61-71.
- 日野林俊彦 (2006)：思春期・青年期の性と性教育 教育と医学, **54**(2), 4-11.
- 泉 ひさ (1987)：現代の性的失業期の諸相と理論—米国の10代の性に関する諸研究を中心にして— 青年心理学研究, **1**, 25-39.
- 蒲池恵美・能塚 彩・酒井章江・澤部なぎさ・古川千絵理・渡邊歩美・平田伸子・新小田春美・加来恒壽・野口ゆかり (2007)：大学生の月経周期・性交・避妊についての知識・動機・行動および自尊感情との関連に関する研究 母性衛生, **48**(1), 97-105.
- 金子和子 (1995)：皮膚科疾患の性治療における意味について 心身医学, **35** (抄録号), 115.
- 金子和子・渡辺景子 (1997)：ワギニズムにおける父娘関係と母娘関係の検討 I—数量的側面から— 心身医学, **37** (抄録号), 149.
- Kaplan HS (1979). *Making Sense of Sex The New Facts About Sex & Love For Young People* 石川弘義 (訳) (1997)：新しい性の知識—すばらしい愛を築くために— 星和書店
- Kinsey A, Pomeroy WB, Martin CE (1948)：Sexual behavior in the human male 永井 潜・安藤画一訳 (1950)：人間における男性の性行為 コスモポリタン社
- Kinsey A, Pomeroy WB, Martin CE (1953)：Sexual behavior in the human female 浅山新一訳 (1954)：人間女性における性行動 コスモポリタン社
- 金子和子 (2001)：セックスカウンセリングの動き 深津 亮・原科孝雄・塚田 攻・針間克己・松本清一・阿部輝夫・金子和子・及川 卓 (著) ころとからだの性科学 星和書店 pp105-122.
- 北山 修 (2008)：性愛と性同一性をめぐる「運動」 臨床心理学, **45**(8), 323-329.
- 児玉恵美 (2009)：性同一性障害の自我境界と自己イメージについて 心理臨床学研究, **27**(2), 230-236.
- 草野いづみ (2006)：大学生の性的自己意識, 性的リスク対処意識と性交経験との関係 青年心理学研究, **18**, 41-50.
- 松本清一 (2005)：性とは 日本性科学会 (監修) セックス・カウンセリング [入門] 金原出版株式会社 pp1-2.

- Masters WH, Johnson VE (1966) : Human sexual response
謝国権・ロバート Y 竜岡訳 (1980) : 人間の性反応 : マスターズ報告 池田書店
- 間宮 武 (1976) : わが国青年 (学生・生徒) における性行動の性差に関する調査研究 (その2) — 環境的諸条件との関連における性差について — 横浜国立大学教育紀要, **16**, 29-48.
- 益谷 真 (1989) : モーシャー・セックスギルト評定項目群の因子分析における性差について 同志社心理, **36**, 36-43.
- 内藤哲雄 (1994) : 性の欲求と行動の個人別態度構造分析 実験社会心理学研究, **32**(2), 129-140.
- 村本邦子 (2004) : 性被害の実態調査から見た臨床的コミュニティ介入への提言 心理臨床学研究, **22**(1), 47-57.
- 小野寺梓 (2007) : 大学生の性行動の現状及びSTD・望まない妊娠の予防に関する効果的な介入の検討 教育学研究室紀要「教育とジェンダー」研究, **7**, 57-64.
- O'Sullivan LF, Meyer-Bahlburg HF, McKeague IW (2006) : The Development of the sexual self-concept inventory for early adolescent girls *Psychology of Women Quarterly*, **30**, 130-149.
- 大川玲子 (1998) : 性と心身医学—女性の側面から— 心身医学, **38**(5), 293-299.
- 大川玲子 (2009) : 性機能障害の臨床から日本女性のセクシュアリティを考える 母性衛生, **50**(2), 261-266.
- 清水弘司 (1979) : 大学生における性の発達と依存対象について 心理学研究, **50**, 265-272.
- Storr A (1964) : Sexual Deviation 山口泰司訳 (1992) : 性の逸脱 同時代ライブラリー
- 忠津佐和代・長尾憲樹・進藤貴子・梶原京子・高見千恵 (2009) : 大学生の性感染症予防行動および避妊行動に対する意識・態度の実態調査—青年期ピアカウンセリングの基礎資料として— 川崎医療福祉学会誌 **19**(1), 93-103.
- 田原歩美 (2010) : 青年期を対象とした性教育プログラムの効果の検討—性的自己決定の向上を目指して— 福山大学こころの健康相談室紀要, **5**, 11-18.
- 高田知恵子 (2006) : 臨床心理士の立場からエイズ・性教育を考える 教育と医学, **54**(2), 37-43.
- Treboux D, Busch-Rossnagel NA (1995) : Age Differences in Parent and Peer Influences on Female Sexual Behavior *Journal of research on adolescence*, **5**(4), 469-487.
- 塚田 攻 (2009) : 短期精神療法で改善した男性性嫌悪症の治療経過 日本性科学会雑誌, **27**(1), 65-70.
- Vicberg Suzanne M Johnson, Deaux Kay (2005) : Measuring the dimensions of women's sexuality: The Women's Sexual Self-Concept Scale. *Sex Roles*, **53**, 361-369.
- 和田 実・西田智男 (1990) : 性に対する態度および性行動の規定因 (I) — 性態度尺度の作成 — 東京学芸大学紀要, **42**, 197-211.
- 和田 実 (1999) : 大学生が性交する際に重視する要因—性差と性交経験種別からの検討— 東京学芸大学紀要第1部門, **50**, 111-119.
- 渡辺 亘・一丸藤太郎 (2002) : 思春期のこころの変化からだの科学, **225**, 28-31.
- 渡辺景子・金子和子 (1996) : ワギニスムスにおけるパートナーとの関係 心身医学, **36** (抄録号), 136.
- 渡辺景子・金子和子 (1997) : ワギニスムスにおける父娘関係と母娘関係の検討II—症例より— 心身医学, **37** (抄録号), 150.
- 財団法人 日本性教育協会編 (2007) : 「若者の性」白書 第6回青少年の性行動全国調査報告 小学館